

マジヤーイフ、アリクサンドル・ヴァリリエヴィチ

サハリン島における古代及び中世の集落の構造について（タグイ 1 集落の例）

『サハリン国立大学研究紀要』第 11・12 合併号、144~148 ページ ユジノサハリンスク、サハリン国立大学 2015 年

Можаев, Александр Валерьевич. О структуре Древних и средневековых поселений острова Сахалин (на примере поселения Тагуй-1). Учёные записки Сахалинского Государственного Университета, вып. XI/XII, сс.144-148, Южно-Сахалинск: СахГУ, 2015.

## 解題

この論文はサハリン国立大学が 2011 年に行ったサハリン島中部の東海岸に位置するタグイ 1 集落 поселение Тагуй-1 の測量・試掘調査に基づき、この遺跡の竪穴群の構成について論じたものである。

文中にもあるようにこの遺跡は戦前から知られており、昭和 7 (1932) 年 8 月 3 日にこの遺跡を訪れた河野広道は「フノツは元泊を距ること半里の北で、昔の温泉宿跡があり、その前の畑地に土器が散列して居り、裏山には多数の竪穴跡がある。こゝで拾得した土器は何れもオホーツク式刻紋土器に属する。」(1933 の 301 ページ)と述べているが、その全体像はこの論文で初めて公にされた。

300 基以上に達する大規模な竪穴群の全貌を明らかにした調査成果として、サハリン州内ではやはり東海岸の南部に所在するセディフ遺跡群の調査(ワシレフスキー2006 など)などと並んでまだ例の少ないものであると同時に、戦後のサハリン島における竪穴住居跡の調査研究を概観した導入部も州外の人間にとって貴重なものである。

原著を収録した紀要は 2015 年 10 月 30 日に発行され、またこの論文の PDF ファイルは 2015 年 11 月からサハリン国立大学考古学教育博物館のウェブサイトで公開されている。<http://www.archaeologysakhalin.ru/lib/>

原文と対比していただければわかるように、竪穴群に関連する主な術語は次のように翻訳した。

жилище с камерой：付属小屋のある住居	жилищная впадина：住居跡	котлован：竪穴
обваловка：周堤	прямоугольник：方形	полуземлянка：竪穴式建物
полуподземное жилище：半地下式住居	ранний неолит：前期新石器	

翻訳と公表に同意いただいた著者マジヤーイフ氏と研究紀要編集委員長のアリクサンドル・アリクサンドラヴイチ・ヴァシリエフスキー教授に深謝申し上げます。

(西脇対名夫)

河野広道 1933 「樺太の旅 (II)」『人類学雑誌』第 48 巻第 5 号、296~303

ワシレフスキー A. A. (福田正宏・熊木俊朗訳) 2006 「サハリン州コルサコフ地区オホーツコエ村「セディフ遺跡群」における新石器時代・初期鉄器時代・中世の文化的複合」『北海道考古学』第 42 輯、1~16

この研究の目的は古代及び中世の集落の構造の研究のために一つの方法を開発することであり、その方法とは現在の地表から視覚的に見分けることの出来る住居跡の配列区画、形状及び規模の識別を基礎にしたものである。新石器時代に登場した地面を掘り窪めた建物の伝統はサハリン島の住民の間で 20 世紀まで存在し続けている。同様の建築方法は北アジアの諸地域に広く分布している。旧石器時代には軽快なテント式の住居が存在した。しかし更新世から完新世への気候の変化が島嶼住民の生活様式に変化を引き起こした。その結果新しい技術が現れ、まったく新しい素材(焼き物)やそれ以前には広く用いらなかった素材(木材)の利用が始まった。海や川で用

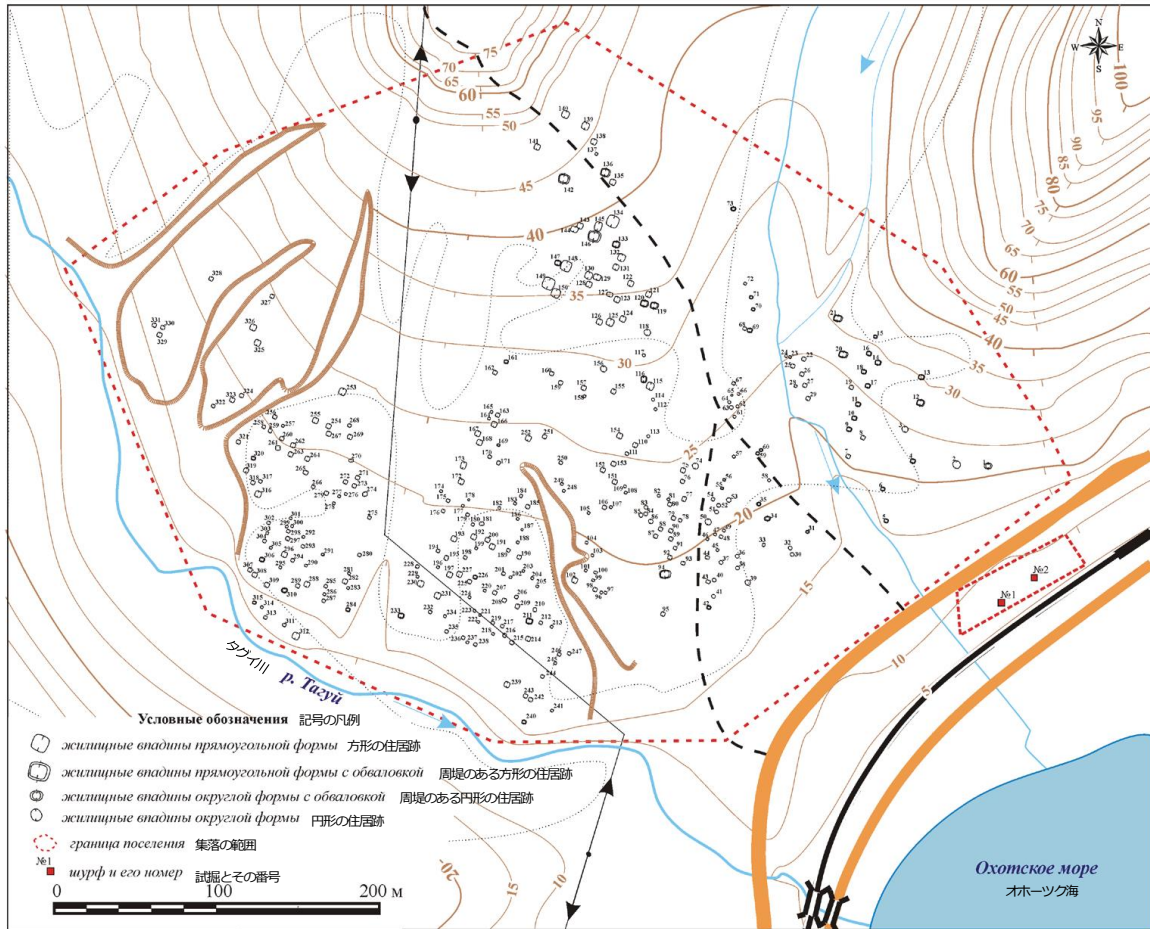


図1 タグイ1集落の平面図

いるボートが現れ、また新しい種類の住居が創造された。それは下部を地面に掘り込んだ構造の堅固な竪穴式建物であり、先行する上部旧石器時代に比べてより多量の木材を使用するものとなった(ヴァシリェフスキイ 2008)。

サハリンでは半地下式住居の跡は考古遺跡ないし集落跡に非常に多く見られるものである。住居跡は程度の差はあれ掘り下げた竪穴として今日なお地表からはっきり確認でき、その形状も明瞭に読み取ることができる。往々窪みのまわりには低い土手、いわゆる周堤があり、時には廊下式の入口を備えている。周堤は半地下式住居建物の要素であり、その形成には住居の建築過程に応じて2つの段階を認めることができる。第一段階は土でできた周堤の形成であり、竪穴の掘削の過程で形成されたものである。第二は壁の高さを増す目的で土を積み上げる段階である。

1955年から2013年までの期間にサハリン島で考古学的な発掘調査がなされた住居は113基ある。発掘の過程でその特徴の調査が進み、住居構造の基本的な要素が明らかにされた。調査済み住居の多くでは、その要素とは竪穴、骨組み及び暖房に関するものである。竪穴の形状については次のような住居が知られている。円形、四辺形、正方形または方形に近いもの、五角形、六角形及び付属小屋のある住居である。四辺形で正方形または方形に近い形状の竪穴はサハリン島では最も古く、また最も広く分布しているものである。この形の竪穴が初めて建築に用いられたのは前期新石器時代である(グリッシェンカ 2011)。楕円形・円形の竪穴はO.A.シューピナとB.O.シューピンの調査したイムチン新石器文化の住居、及びアニヴァ文化の住居に特徴的である(シューピナ 1987、ヴァシリェフスキイ・シューピナ 2002)。五角形の竪穴住居は古金属器時代に現れる。多角形の住居建築の構想はさらに発展して六角形の竪穴が現れた。この形式の竪穴は中世に広く分布している(ヴァシリェフスキイ 2001)。付属小屋のある住居は前1千年紀に登場した。この住居を構築したのは末期新石器と古金属器の文化の担い手た



図2 タグイ1集落試掘坑No.2の考古資料

サハリン国立大学考古学教育博物館所蔵、資料番号912 1~4:口部、5:平底土器の底部、6:丸底土器の底部

ちであった（ヴァシリェフスキイほか2010・2013a、マジヤーイフ2011）。

7,500年前より古い住居跡は今日の地表からは確認できず、発掘調査の過程でのみ検出可能なものである（グリッセンカ2011）。考古遺跡において確認のできる最古の調査対象は楕円形または円形で直径5~6m、深さ0.1~0.2mの窪みである。より年代の新しい遺構はもっと明確な輪郭を持ち、住居跡の隅の形状や特徴から形状を判断することができる。住居を発掘すれば竪穴の形状、規模や特徴はずっと正確に捉えられるが、結局地表に見えている全体の形状が変わるわけではない。調査の結果そうした相関が最もはっきりしているのは付属小屋のある住居であり、また五角形・六角形の竪穴である。かくして、現在の地表から視覚的に確認される住居跡の形状と規模から、住居がどの文化に帰属するか、いつ頃建てられたかについて予察的な情報を得ることが可能であろう。

こうした前提のもと、現在の地表に見えている住居跡の分布、形状及び規模を基礎とした古代・中世集落の構造の調査によって、遺跡についての補助的な情報を得ることができるのである。例えばタグイ1遺跡のように住居跡の数が相当多い集落遺跡の場合、ごく簡易なGIS手法を用いることが有効である。

タグイ1考古遺跡はオホーツク海に面したサハリン島の東海岸にあり、サハリン州の「マカーラフ都市管区」自治体のタグイ川河口部に位置する。タグイ1集落はサハリン東南部の集落のうち最も広大なものの一つである。

この集落は1932年に日本の考古学者河野広道が発見した。この遺跡は日本の考古学文献ではフンノブという名前で行われている（新岡武彦・宇田川洋1992）。1995年と1998年にはサハリンの考古学者C.B.ガルブノフとB.Д.フィダルチュークが集落の踏査を行った（ガルブノフ・フィダルチューク2003）。2011年にはサハリン国立大学の考古学調査隊の参加者が遺跡の踏査を行った（マジヤーイフ2012）。地形測量の結果、現状での遺跡の範囲と、現時点の地表で視覚的に確認できる住居跡が決定され、試掘が行われた。集落の占める面積は172,920m<sup>2</sup>に及ぶ。遺跡の主要な部分はカルサコーフ・ノーグリキ間の鉄道の西側のタグイ川の谷の、いくつかの沢に開析された左岸斜面と無名の小川の谷に位置し、331基の住居跡が集まっている。住居跡群は海拔15~50mの緩く傾

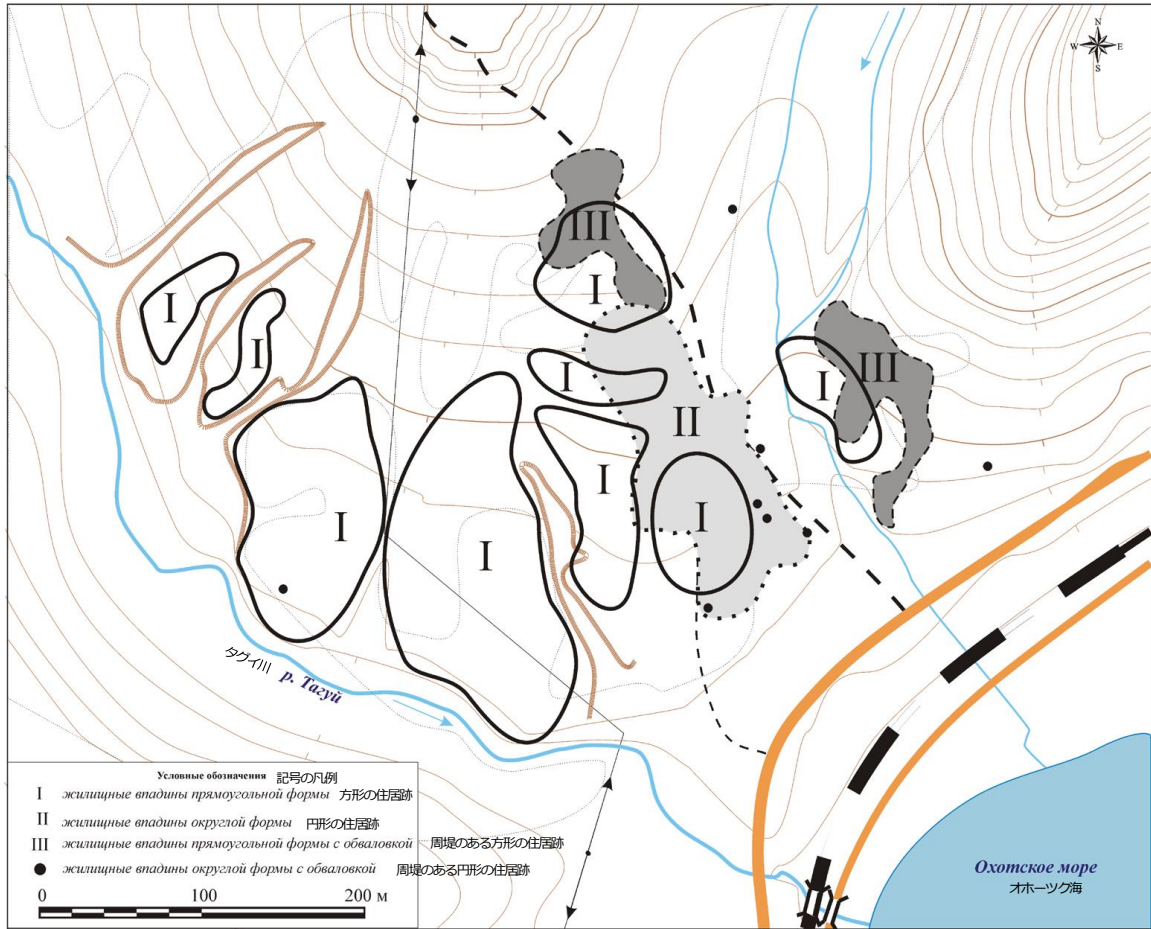


図3 タグイ1集落、集落の構造

斜した段丘面を占めている（図1）。

島の南部を日本が統治していた時代（1905~1945年）に、現在まで使われている鉄道と自動車用の道路ができて集落は分断された。これにより文化層の一部に回復不能の損壊を生じ、またこれらの土木施設の改修に際しても破壊が起きている。

2011年に入れた試掘坑 No.1 と No.2 では厚さ約 1.5m の文化層から 492 点の遺物が発見された。発見された遺物のうち土器片が 96% を占めている。土器は概ね中世の江ノ浦土器群に関連するもので、この土器群はサハリン全島に分布し 7~9 世紀の年代が与えられている（図2の1~5）。サハリン島の中世土器群は手づくねの容器が特徴であるだけに、試掘坑 No.2 で轆轤を用いて製作した台付き土器の破片が発見されたことは大陸の住民との文化的関係を物語っている。試掘坑 No.2 の下部層準からは江ノ浦式の土器とともに古金属器時代のうちでもより早期の文化に属する丸底土器の下部が発見された（図2の6）。試掘坑で発見された遺物が示す遺跡の年代は古金属器時代（前5~5世紀）と中世前期（7~9世紀）である。しかしこの遺跡により古い新石器時代の文化層が存在する可能性もあることは、少数の石製遺物がこれを示唆している。

タグイ1集落の構造の研究は検出された331基の住居跡の配置の分析に基づいたものである。住居跡群はその形状によって、円形、周堤を伴う円形、方形及び周堤のある方形の4つの型に分けて理解できる。

円形の住居跡は33例あり、検出された総数の10%を占める。円形の窪みは31個までが遺跡東部の無名の小川の右岸に位置しており標高15から33mの場所にある。これらは約100×200mの規模の独立した区域を占めている。残り2つの同種の窪みは小川の左岸に位置する。

周堤のある円形の窪みは少数のグループを形成する。8基が確認されたにすぎず、検出された総数の3%であ

る。周堤のある円形の住居跡は集落の全域に孤立して散在するが、無名の小川に沿うものが多く5基を占める。

最も数の多いグループは方形に近い形状の住居跡であり、249基、検出総数の75%を占める。これらは主に集落の中央部と西部に位置し、標高15-50mのところにある。方形の住居跡の集中範囲は9つに区分することができる。

周堤のある方形の住居跡は検出総数の12%を占め、41基を確認している。周堤を伴う方形住居跡のうち19基は集落の全域に基本的に単独、あるいは2基一対で散在している。小川の左岸に15基が密集したグループ、また右岸には7基のグループが区分される。

タグイ1集落の構造分析は4種類の住居跡が互いに異なる占地を見せて分布していることを示している(図3)。円形の住居跡は無名の小川に沿って遺跡の東部に集中しており、もしかすると、文化的または年代的に単純な一群であることを示唆しているかも知れない。また方形の住居跡は9つの集中範囲に分かれており、この集落での地区分化の現象を示している可能性がある。集落内の住居跡の配置構造の分析によりタグイ川河口への居住がいくつかの時期に分かれることが示唆される。このことはまた試掘坑から出土した、古金属器と中世という2つの時代に関する遺物からも立証される。

構造研究の適用によって、ある程度まで集落の姿の変化を復元し、地区分化の現象を抽出することができる。そうは言っても、住居跡の位置と外見の分析のみに基づく調査は予察的な性格のものであることも我々は承知している。現代の自然科学的な研究方法の利用によって、さらに新しい種類の情報が得られるかも知れない(ヴァシリェフスキイほか2013b)。小規模なボーリングで採取した試料による地学的な研究法とAMS年代測定を総合すれば集落の年代に関する情報が得られる可能性があり、個々の住居跡についても考古学的な発掘を実施せずに年代決定が可能だろう。こうした方法の適用により、集落構造の分析のために十分客観的なデータを得られることになるだろう。

#### 文献

- 1、ヴァシリェフスキイ、A.A. サハリン島の石器時代/A.A.ヴァシリェフスキイ著、ユジノサハリンスク、サハリン国立大学出版部、2008年、412ページ。
- 2、ヴァシリェフスキイ、A.A. 今日の研究に照らしたオホーツク文化の問題(サハリン、北海道、クリール諸島、1980-90年代)/A.A.ヴァシリェフスキイ著、『サハリン国立大学研究紀要』、2001年、第1号、3-14ページ。
- 3、ヴァシリェフスキイ、A.A. 2003-2007年のサハリン国立大学による考古学的調査/A.A.ヴァシリェフスキイ・B.A.グリッシェンカ・B.Д.フィダルチュークほか著、『諸千年紀の帳をひらいて』ジャンナ・ヴァシーリイヴナ・アンドリエーヴァ 80歳記念学術論文集/H.A.クリューイフ・Ю.Е.ヴァストリツォフ責任編集、ウラジオストク、ООО「リエイ」、2010年、73-88ページ。
- 4、ヴァシリェフスキイ、A.A. 古金属器時代遺跡の研究(前1千年紀)。2013年サハリン島における/A.A.ヴァシリェフスキイ・B.A.グリッシェンカ・П.А.パーシツィフほか著、『シベリアと隣接諸地域の考古学、民族誌学、人類学の諸問題』ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族誌学研究所2013年度成果発表会資料、ノボシビルスク、ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学民族誌学研究所出版部、2013年(a)、19巻、191-195ページ。
- 5、ヴァシリェフスキイ、A.A. 歴史文化物件の非破壊モニタリング・調査・保存方法—新たな哲学もしくは現代考古学発展のもう一つの方向(石油・天然ガスプロジェクト「サハリン1-3」におけるサハリン国立大学サハリン考古学・民族誌学研究室とロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族誌学研究所の試みから)/A.A.ヴァシリェフスキイ・B.A.グリッシェンカ・П.А.パーシツィフほか著、『グローバリゼーション、地域の発展と環境問題』学術・実務国際会議資料集(2013年9月)/B.H.イファーナフ・E.H.リシツィナ責任編集、ユジノサハリンスク、サハリン国立大学出版部、2013年(b)、101-108ページ。
- 6、ヴァシリェフスキイ、A.A. サハリンとクリール諸島の新石器/A.A.ヴァシリェフスキイ・O.A.シューピナ著、『サハリン博

- 物館報』2002年、第9号、196~230ページ。
- 7、ガルブノフ、C.B.。マカーラフ地区の考古遺跡一覧表／C.B.ガルブノフ・B.Д.フィダルチューク著。『サハリン博物館報』、2003年、第10号、379~396ページ。
  - 8、グリッシェンカ、B.A.。サハリン島の前期新石器／B.A.グリッシェンカ著。ユジノサハリンスク、サハリン国立大学、2011年。184ページ。
  - 9、マジヤーイフ、A.B.。チャイヴァ 1 集落、サハリン島ヌガヤン（2002~2010年の調査成果若干）／A.B.マジヤーイフ著。『北ユーラシアの考古学・民族誌学・古環境学：問題、探査、発見』第51回地域（第7回全ロシア）考古・民族誌学学生・青年研究者会議、北部沿アンガラ地方旧石器芸術発見30周年およびクラスノヤルスク考古学調査団55周年記念、クラスノヤルスク市、2011年3月22~25日／H.И.ドラズドーフ責任編集、E.B.アキーマヴァ・И.В.スタシューク巻号責任、編集委員会、B.И.アスタフィエフ記念クラスノヤルスク国立教育大学、クラスノヤルスク、2011年、185~187ページ。
  - 10、マジヤーイフ、A.B.。2011年野外調査期間のサハリン国立大学考古学第3調査隊の調査に関する学術報告。サハリン島サハリン州ドーリンスク、カルサコーフ及びマカーラフ諸地区における考古学的踏査：草稿に代えて／A.B.マジヤーイフ著。ユジノサハリンスク、2012年、ロシア科学アカデミー考古学研究所文書、156ページと挿図。
  - 11、シュービナ、O.A.、イムチン新石器文化集落の住居（北サハリン）。プレプリント、ユジノサハリンスク、1987年。